

5. 札幌上空の圏界面高度について

金戸 進 (札幌管区気象台)

最近5年間(1976~1980年)の札幌上空の圏界面高度について統計を行なった。

第1圏界面としては、寒帯圏界面(12~4月)が7~9 km, 中緯度圏界面(4~11月)が10~11 km, 熱帯圏界面(7~9月)が15 kmであった。

第2圏界面以上は、冬には出現個数が多く(平均すると各観測毎に1個程度)出現高度は12~23 kmと広範囲だが、夏には個数は少なく(冬の1/4程度), 出現高度は熱帯圏界面(15 km)に一致している。

また、暖冬年では寒帯圏界面高度が数 km 高くなった。平年では夏は中緯度圏界面と熱帯圏界面が半々に出現するのが暑夏年ではほとんど熱帯圏界面が出現するといった気候変動に対応する現象が見られた。

6. 北海道における地上風の特徴

——主成分分析法による解析——

加藤央之(北海道大学環境)

北海道における風の分布や地域的な特徴を客観的にとらえることを目的として、気象庁 AMeDAS の風のデータ(1978年)を主成分分析法を応用した方法を用いて解析した。これは、風のデータを U, V 方向に分けて主要変動パターンを取り出し、各々の特徴的なパターンの結合により気流の地域的特徴を調べたものである。ここで得られた結果は様々な風向の一般風に対するもので、特

にその一般風速が強い場合の気流系に相当しており、これらは従来行われた風の調査報告と対応され、検討された。さらに各地点毎に求められた風速値を用い、クラスター分析により、強風時の北海道内の風の地域的特色を明らかにした。

7. 低温型雪結晶の雪片について (POLEX-North)

藤吉康志(北海道大学低温研)

菊地勝弘(北海道大学理学部)

冬期の北極域においては、太平洋側から比較的暖かい空気が中層に入りこんでいる期間と、気塊の入れかわりがほとんどなく、放射冷却によって下層に厚い等温層が形成されている期間で、エコー頂高度が3000 m 以上であったときにのみ、低温型の雪結晶の雪片が降った。層状性のエコーが現われたときには、砲弾集合あるいは交差角板の大きくない雪片が降り、大きい雪片(角柱、砲弾集合、交差角板の何れも)は、対流性エコーが現われ、雪結晶が濃密雲粒付きとなったときにのみ観測された。雲粒付きでない角柱は、砲弾集合や交差角板に比べて雪片になりにくい傾向が見られた。砲弾集合の場合には、粒径く大きいときに雪片になり易く、交差角板は砲弾集合に比べて、粒径が小さくても雪片を形成し易い傾向が見られた。雪片が降る時間は何れの場合でも短く、上空からすでに周囲よりも強いエコー強度を持つ領域が地上に達したときにのみ雪片が地上で観測されている。

第1回 TOWER METEOROLOGY に関するシンポジウム開催案内

日時 昭和57年7月23日(金) 10~17時

場所 気象研究所講堂

(茨城県筑波郡谷田部町長峰 1-1)

主催 気象研究所鉄塔運用委員会

(委員長 内藤恵吉)

プログラム

1. 研究発表(10:00~15:00)

発表予定者

内藤 恵吉(気研衛星) 小川 靖(公害研)

藤田 敏夫(気研予報) 山本 晋(公資研)

花房 龍男(気研物理) 甲斐 憲次(筑波大)

藤谷徳之助(気研物理)

山下 喜弘(気研衛星)

伴野 登(元 気研衛星)

2. TOWER METEOROLOGY について

(Free discussion) (15:15~17:00)

話題提供者 時岡 達志(気研予報)

室田 達郎(建築研)

3. 懇親会(17:00~18:00)

問合せ 0298-51-7111(気象研究所)

内 261(山下)

内 607(花房)